

実践活動「あそびの森」の総合的検証（2）

－出張「あそびの森」を通じた地域との連携－

長谷部 和子・杉山 喜美恵

はじめに

平成15年に成立した「次世代育成支援対策指針法」は少子化の流れを食い止めるために各自治体が具体的な施策を定め、それを行動計画として打ち出すことを決めた。これに伴って岐阜県各地に、以前からあった児童館とは別に親子を対象にした施設「子育て支援センター」や「子ども館」など地域でのネーミングは様々であったが、数多く設立された。

平成14年度に岐阜県内各務原市にも2館開設された。初期は他施設の中に併設されるような形を取っている所が多かったが、平成18年頃には、どの地域でも独立した施設とした未就学児施設が数多く設立されるようになった。

大学の役割として学生たちと共に、地域の子育て支援の手助けができればと平成16年に保育実習室「あそびの森」の学内での開設に伴い、学外へ出て実習の場とする「出張あそびの森」の要請が各地域の支援センターからかかるようになった。その中で学生たちが学んだ成果を現地まで足を運び、見せたり、子どもたちと交流する機会を持つことは、学生の成長のみならず、各地域の子ども施設にとってプラスであったのではないかと考える。

学生側にとって得るものは多く、大きく成長するステップのひとつとなっている。これらの施設に足を運ぶのは年齢的に、0、1、2歳児が多く、常に親か祖父母と一緒にあることである。通常これらの年齢の幼児は保育園・幼稚園児では見られるが、親とべったり、くっついていないことは登園・帰園以外にはない。子どもとの関わりのみならず、親との関わりを間近に見ることは、学生にとって学ぶことは大きいと言える。

更に、大学内で実施されるイベントである場合は環境に変化はあまり見られないが、各地に

バスで移動することによって、学生らの気持ちの中には変化を期待し、また、まったく知らない人々に自分たちが見られる緊張感が現れ、真剣に取り組む姿勢がみられる。

ここでは、学外実習として実施した内容を取り上げ、地域との連携の意義について考察したい。

1. 実施事例（長谷部ゼミ）

（1）あさひこども館

平成18年7月29日（土）

短大が立地する各務原市に平成14年度開始の児童館から分離し、近隣にないスタイルの「子ども館」がリニューアルオープンした。そのセレモニーに学生12名と参加。

絵本読み、小物作り、ボール投げ

平成19年12月5日（水）

学生23名

1年前のオープニング参加以来の訪問であるが、ゼミ学生たちの顔ぶれがすべて変わり、10月のゼミ開講以来初めての「出張あそびの森」となった。パネルシアター「柿ノ木マン」を3人で演じたが、その後の職員の方々の実施されるイベントに圧倒され、子どもたちと親さんの後ろや横で一緒に踊ったりする姿が見られたが、中々、親子の中には入っていけなかった。最後に、学生たちは「子ども館」も将来的に職場になる可能性があることに驚き、館長に質問する姿も見られた。これらの施設職員の方々は学生たちにとってすべてがモデルであり、将来的な職業の選択肢になる。

（2）子どもげんきハウス

平成20年度 12月10日（水）・12月17日（水）

1歳児23組 2歳児18組

親子の輪の中に学生たちが上手く入り込み良い雰囲気だった。手作りのエプロンシアターはよくできていて子どもたちも見入っていた。

若い学生さんと親子の触れ合いでよい雰囲気だった。1年生は慣れていなくて恥ずかしそうにしていたが学生たちには良い経験になったと思う。

平成21年度 12月9日(水)・12月16日(水)

1歳児親子17組 2歳児親子17組

1年生は不慣れな印象を受けたが、2年生の学生たちは親子の交流タイムではにこやかに触れ合う姿が見られた。1歳児のためかサンタクロースを見て泣き出したり、怖がったりする子もいた。サンタクロースの登場に工夫を凝らしていて、お母さんたちから歓声が聞こえた。学生たちは、子どもの目の高さに合わせて、しゃがんで子どもたちを迎え、良い雰囲気であった。

平成22年度 12月8日(水)・12月22日(水)

1歳児20組 2歳児11組

学生たちは、最初は職員から声をかけてもたっても中々参加できないようだった。しばらくたって慣れると、にこやかに参加できるようになった。職員の方々からの声掛けが的を得ていて、学生たちの助けになっているようである。2歳児の場合は親子さんの数より学生の数のほうが多かった。事前打ち合わせをハウス側ともしっかりと多くする必要を感じた。1歳児 CCNで放送された。

平成23年度 12月7日(水)・12月14日(水)

1歳児17組 2歳児20組

マルモリ体操が親さん、子どもたち双方に人気があり、楽しそうに踊っていた。学生たちが子どもさんの名前を呼んでいたようだが、心使



写真1. クリスマス会の様子

いが感じられた。お客さんになっている学生さんもかなりいたが、徐々に交流できるようになり、遊んでいる姿が見られ良かった。イベントのツリー作りに時間がかかり、交流時間が短くなったのは残念であった。

(3) 高富児童館

平成21年度 ひな祭り 3月2日

親子22組 参加学生8名

年度末にこの時期に大勢の学生たちと参加することは難しく、少人数での訪問となった。パネルシアター「ひな祭り」やひな祭りにちなんだ歌の合唱など、学生たち手作りの雛壇を置いての交流となった。パネルシアターは年齢の低い子どもたちには理解しにくかったかなと感じたが、親さんのほうが「面白かった」と言っていた。学生たちはホッとしたようであった。

平成21年度 3月31日(水)

オープニングイベント参加

参加人数約200名 参加学生15名

漫画からドラマ化され、その主題歌となった「キセキ」の歌をハンドベルで演奏し、オープニングとした。その後、パネルシアター、絵本読みなどを実施し、キッズダンスで締めくくった。

平成22年度 2月23日(水)

親子25組

参加学生5名(男子4名、女子1名)

男子学生がメインでイベントを行うことに職員の方々のみならず、親さんたちも驚きを持って見学された。しかし、保育を目指す学生であることに違いはなく、却って女子には見られない動きがあり、喜ばれた。CCNで放送された。

次の示す2例の訪問は、岐阜県警とのコラボレーションで、「子どもの安心・安全」を啓発するためのイベントを入れた内容となった。キッズダンス、学生たちの催し物に加えて、紙芝居やペープサートで「子どもの連れ去り防止」を子どもたちと親さん、双方に理解・確認してもらい、今後とも注意する話を入れた。地元新聞に掲載された。

平成23年度 7月6日(水)

親子 35 組 岐阜県警とのコラボ
事業（安心・安全教育）
参加学生 14 名

七夕祭りのイベントを行う。高富児童館は22年度まで2月か3月初旬に「雛祭り」のイベントを見せることで参加していたが、その時期は2年生は就職実習に入っている学生も多く、1年生は実習経験も皆無で何かを見せることなどおぼつかない状態であるため、実施時期の変更を願い出て、7月の七夕時期とした。

(4) 岐阜県揖斐郡大野町揖斐川町立西保育園
平成24年 1月18日(水)

園児 125 名 (2・3・4・5 歳児)

鬼のパンツを皆で踊り、パネルシアター「ももたろう」を演じた。その後、「しっぽ取り」ゲームを各年齢別で分かれて行ったが、学生の付けているお面が「鬼」のお面であったため、2歳・3歳児の中には泣き出す子もいて、年齢によって受け止め方が大きく違うことが学生たちの気付きとなった。

2. 実施事例（杉山ゼミ）

杉山ゼミでは、10年間にわたり、学外での子育て支援活動に参加しているが、ここでは主に平成23年度の実施事例をとりあげ、参加者の感想、学生のレポートを通して学外活動参加の意義について考察してみたい。

(1) 事例の概要

①長良児童センター

長良児童センターは岐阜市の長良地区にある児童厚生施設である。

午前は無就園児親子に対する子育て支援活動を実施しており、曜日によって対象となる子どもの年齢が異なる。

我々はカリキュラムの都合により、水曜日に実施されている1歳児とその保護者対象の連続講座「ポロちゃんクラブ」に参加させていただいている。講座は希望人数が多いため第1・3週と第2・4週参加の2グループにわけられており、第1週と第2週、第3週と第4週は同じ内容となるため、学生を半分に分けて参加させ

ていただいている。参加組数は年によっても異なるが、例年、20組前後である。

平成23年度は、7/6と13、1/11と18に参加させていただいたが、7月（前期）は2年生、1月（後期）は1年生が参加した。

7/6、13は、1学期の最終回となり、修了式とお楽しみ会が行われる。1/11、18は3学期の最初の会となり、初めて会う人達が集まるので親睦を深める会となる。講座は全体で約1時間であるが、我々はその一部（30分程度）をいただき、企画実施させていただく。内容は手あそび、大型絵本、パネルシアター、大型紙芝居、ダンス等パフォーマンス系のものが主である。

そのほかに12/7のクリスマス会にも参加させていただいている。平成23年度の内容は、ダンス、ペープサート、大型絵本、手あそび等であり、会の趣旨にあわせクリスマスにちなんだ演目を選んでいる。

また、年によっては児童センター主催講座の手伝い（例えばボディペインティング）、母親対象講座の託児を受けることもある。

②岐阜市青少年育成市民会議家庭部会関連活動

岐阜市青少年育成市民会議家庭部会主催の「子育てを考える講座」および「親子ふれあい教室」での事例について述べる。

岐阜市青少年育成会議とは地域社会における青少年育成活動を支援し広げていくための組織であり、自治会、子ども会、学校、PTA等との連携を図りながら、地域に根付いた事業、活動を企画推進している。会長会・推進員会と家庭部会、少年育成部会、青年育成部会、社会環境部会の4専門部会があり、主に家庭部会が就学前の子育て支援をおこなっている。具体的には「子育てを考える講座」や講演会を開催し、父母及び育成者の自覚を深め、「親子ふれあい教室」を開設し、自主クラブへの移行に努め、乳幼児教育の重要性を啓発するための取組を行っている。

「親子ふれあい教室」は、各校区が地域の現状に合わせて年数回連続して開催される。当ゼミでは、平成14年から、毎年ながら親子ふれあい教室に参加させていただいている。ながら

親子ふれあい教室は、0 から1 歳児とその親を対象に9 月から12 月に10 回実施される連続講座である。リトミックや救急救命などそれぞれの回で内容が異なり、我々は11 月に「学生さんと遊ぼう」というテーマでその回をまかせていただいている。例年、最初にペープサートをみてもらい、それから自由にあそび、最後にダンスをするという流れである。最近は、対象となる子どもの年齢が低いことと2 年生が実習中で1 年生のみの参加となるため、慣れていないことを考慮し、じっくりかかわれるように1 組の親子に学生が1 人つくという担当制を取り入れている。

平成23 年度は11 月9 日、10 時30 分から12 時まで19 組が参加した。長良青少年育成市民会議家庭部会からいただいた実施報告書には、「手作りの工夫をこらしたおもちゃがいっぱいで、皆ご機嫌で遊んでいた。ティータイム時に学生さんとお母さんの間で話がはずんで良かった。学生さんがよく遊んでくれて赤ちゃんもとっても楽しそうだった」と書かれていた。かわりに慣れていない学生にとってどうしてもかわらなくてはならない担当制は活発なコミュニケーションを引き出す効果的な方法となる。保育者となった場合、保護者支援は重要な責務である。実習で子どもたちとかかわることはできるが、保護者とかかわる機会はほとんどない。したがって、この親子ふれあい教室への参加は保護者とのコミュニケーションを学ぶ絶好の機会となっている。

「子育てを考える講座」は複数の小学校区で構成されるブロックごとに年2 回程度開催されるものである。岐阜市には5 ブロックあり、平成23 年度はそのうちの3 ブロックから依頼があり、担当させていただいた（第2 ブロック：9/15、第4 ブロック：9/19、第1 ブロック：10/26）。

対象は未就園児とその保護者であり、校区ごとの参加組数を限定するものから自由参加のものまで各ブロックによって状況は異なるため、それぞれの参加者は40 組程度から100 組以上と幅広い。大規模なイベントとなるので、1、2 年合同で参加する。

平成23年度 第4ブロック「子育てを考える講座」

みんなであそぼう！
けんきいっぱい！

今日はタイトルのとおり、お子さんと元気いっぱいあそびましょう！
子どもは「あそびの天才」と言われますが本当にその通りですね。たった一枚の布、一本の棒からでも思いがけないほど楽しい遊びを発見します。

以前、学生が保育園での実習で0・1歳児さんに保育をさせていただく機会がありました。彼女はいろいろと考えた結果、ペットボトルでボーリングのピンを作りボールで遊ぶという「ボーリングあそび」をすることにしました。ペットボトルの中に首がでるようビーズをつめて、いろいろな色のビニールテープでかざり、一生懸命準備してはいよいよ当日を迎えました。ピンをたて、ボールをころがして「こらやてあそぶんだよ」とお手本を見せました。子どもたちはどうしたと思いますか？

おもしろにペットボトルのピンをむんずとつかみ、顔面の笑顔でそれをマラカスのように振ったのです。大人は「これはこらやてあそぶもの」という固定観念にとらわれてしまいがちです。ピンがたててあって、ボールがあれば「ボーリング」、というように。でも今日はそんな固定観念を捨ててあそんでみましょう。お子さんがいろいろな遊び方を教えてくれますよ。きっとたくさん発見があると思います。

そして、ご自分のお子さんがどういうあそびが好きなのか、どんなところに危険がほそんでいるのか、そんなことも見ていただけたといいですね。

ダンボールハウス、すずらんテーブル、手作りおもちゃ、おねえさんとしっぽとり・・・童心にかえてたくさんたくさんあそんでください。そしてお家へ帰ってからの生活で少しでも生かしてもらえそうなお話が、何よりもうれしいです。

また、この講座はブロック単位で行われるので、普段あまりお話をしたことのない方もたくさんいらっしゃいます。この講座が新しい出会いのきっかけになるとうれしいです。

私たちも楽しい時間になるよういっぱいがんばりますのでよろしくお願いたします。

図1. 子育てを考える講座で配布した資料



写真2. 子育てを考える講座での様子

おおむね9月後半から10月に実施されるのだが、この時期は後期が始まった直後であり、1年生ははじめてこのような地域の子育て支援イベントに参加することになる。

一例として、平成23年度、第4ブロックで実施した活動を取りあげる。テーマは「みんなであそぼう!げんきいっぱい」とし、子どもと遊ぶことを通して子ども理解を進め、家庭でのあそびのヒントを持って帰ってもらうということねらいとしている。ねらいと内容に関しては、各ブロックの家庭部会役員の方々々と打合せをし、決定した。このように打合せをする機会を設けそれぞれの思いを伝え合い、共有することがより参加者に楽しんでいただける講座の実施につながると考える。

1,2年合わせて29名で参加した。具体的内容は図1に示されるとおり、学生によるペーパーアート、大型絵本のあと、親子で簡単にできるふれあいあそび、参加者同士が知り合う機会としてわらべうたの「お茶をのみにきてください」をアレンジして行った後、持参した手作りおもちゃで自由にあそぶ時間とした。最後にみんなで踊り、終了という流れである。

次に学外活動に参加する意義を参加者、学生の感想からみてみたい。

(2) 考察

①参加者の感想から

「子育てを考える講座」に参加した保護者の感想を岐阜市第4ブロック青少年育成市民会議家庭部会がまとめてくださった。以下、抜粋して紹介する。

ア. 活動の広がり

- ・いつも家で母と二人きりなので、今日はとても楽しく遊べた
- ・手作りの遊びなど、ふだん遊ばない遊び方ができ、すごく目がキラキラしていた。
- ・いつもと違った場所で、おもちゃや歌、踊りをして、すごくはしゃいでいた。
- ・はじめは緊張していたが、笑顔のお姉さんたちに囲まれ、同じ年代の子どももいたので、すごくうれしそうに遊べてよかった。

イ. こんな機会を

- ・こんなに楽しいものなら、もっとみんなにし

らせてあげればよかった。またこうした講座があったら参加したい。

- ・学生さんの実習を兼ねて、また子どもたちが遊んでもらえると、とても楽しい。
- ・またこんな機会を作っていただけるとうれしい。
- ウ. 手作りあそび(楽しかった・楽しんでいた)
- ・手作りのおもちゃがたくさんあり遊び足りないほど。もっと遊びたがっていた。
- ・作ったおもちゃもいろんな種類があって、子どももとっても楽しかったようである。
- ・おもちゃが手作りで、とても凝っていてびっくりした。子どもも喜んで遊び、楽しい時間が過ごせた。
- ・手作りおもちゃがすごい。段ボールの家が気に入っていたようであり、子どもがとても楽しそうに遊んでいた。
- ・おもちゃが工夫してあって楽しめた。子どもはカラーテープのプールがお気に入りであった。
- エ. 手作りあそび(参考になった・作ってみよう)
- ・手作りおもちゃにも興味を示していたので、家でも作って遊ばせてみようと思った。
- ・身近なものでもおもちゃになることに改めて気づいた。でも、作るとなると・・・

オ. 学生さんに感謝

- ・学生さんたちもとても丁寧に楽しかった。
- ・学生さんたちの暖かいまなざしがよかった。
- ・学生さんにあそんでもらうのは初めてで、楽しかった。

カ. 課題

- ・ふれあいあそびの位置
- ・学生のお姉さんたちが照れなしにしゃべってくれたり絵本を読んでもくれたりしたらよかったなあと思う。
- ・音楽で遊べるものがもう少しあると楽しかった。反省すべき点は多くあったが、おおむね好意的な感想をいただくことができてうれしく思う。参加者にとっても学生との触れ合いは「先生」とはまた異なり、楽しい時間となるようである。地域で実施される子育て支援活動においてその中心となる人々(例えば児童センターの職員の方々)は学生ほど人数が多くない。したがって、参加者一人一人に係ることが難しい場合も

ある。その点、学生は数が多く、比較的じっくりかかわることができるという利点があるように思う。

「子育てを考える講座」は前述したように比較的大規模な子育て支援イベントであり一つのゼミで担当することは実施時の安全性および十分な準備という点からみると難しいかもしれない。ゼミ同士の連携も今後検討されなければならない。実施時の安全性への対処法として、平成22年度よりゼミでそろいのTシャツを作り、学内外を含めイベント時には着用するようにしている。その結果、参加者が多くても学生の姿を見つけることができ、不測の事態に備えることができるようになった。

②学生レポートから

学生にとってこのようなイベントの企画をし、実践をすることは貴重な機会であり、多くの学びを得られるが、学生のレポートからその学びを具体的に見ていきたい。

1年生で多く言及されている点は、見て学ぶことの大切さである。例えば

子どもたちが来だすと先輩達はすつと子どもの方へ行き、話しかけながらお母さんとの会話を大切にしていました。そうすることで子どもが安心して自分たちに話しかけてくれるようになりました。私はただ子どもに声を掛けることしかできなかったのが本当にすごいなと感じました。

ペープサートや踊りをする時の盛り上げ方、声の大きさや明瞭さなど私と違うところがたくさんあり、とても勉強にありました。

に代表されるように2年生の姿から学ぶということである。1年生はこのような地域子育て支援でどのような活動がなされているかということに関してほとんどといってよいほど知識はない。その時にまずモデルとなるのは2年生であり、2年生の動きから親との関わり方、保育技術等多くのことを学んでいる。

また、もう1点は児童センターの職員、あるいは教員から学ぶということがあげられる。

この日は施設の方がクリスマスの踊りをさされました。踊りはもちろんはつきりしていても楽しくなりました。が、踊りを踊る前後の言葉や動きで子どもを一瞬で引きつけるようなユーモア溢れる流れで本当に感動しました。お母さんも施設の方の口調で笑っていたりと、私たちの時とは全く違う雰囲気でした。こういう出し物が本物なんだと思いました。いつかはこの施設の方たちみたいなお出し物ができるようになりたいと強く思いました。

先生が子どもの前で話をする時先生の表情がガラリと変わり、子どもに分かりやすいように優しい声でした。先生が子どもや親さんとわらべうたをしている時の雰囲気がとても印象的でこんな先生だったら保護者の方も安心するんだろうなあと思いました。

1年生は実習前であるため、実際に活動している姿を見る機会はほとんどない。さらに児童センターは幼稚園や保育所とは参加者のニーズが異なり、職員の方々は参加者を楽しませる高い技術を持っている方々が多い。また、教員も授業の中では演じることに限界があり、現場しか出せない雰囲気もある。そのようなことを身をもって経験することは言葉では伝える以上の学びとなるように思う。

1年生は先輩、職員、教員等モデルから学ぶということが主であるが2年生は学びが具体的になってくる。

ハプニングはつきものだったのでそうした時に臨機応変に対応していく力が必要だと知りました。

楽しくイベントを行うためには色々なことに注意して行かないといけないと思いました。制作では、はさみが危険なので親の方にやってもらったり、そばで見守ることが大切ですし、遊びの時も一緒に遊びながらそばに危険なものがないか、ぶつかったりしてしまわないかと注意をして見ていくことが大切だと思いました。

私が身についたと思うことは3つあります。1つ目は、人の前に立ち、胸を張り、自分自身も楽しみながら活動ができるようになった事です。・・・中略・・・2つ目は子どもたちの「やりたい」「遊びたいけど、怖い」などの気持ちを受け止め、個人にあった支援を考えることができるようになった事です。・・・中略・・・3つ目は活動を行う環境構成や、活動に使う道具、子どもたちの様子を見て、どういった事が危険か、怪我につながる事はないかなど、危険予測をし、事前に注意をして、危険を取り除いておくなど、する事ができるようになった事です。

子どもたちが転ばないように、ブルーシートはしわがないよう伸ばしてしっかり固定したり、「つるつる滑るから気をつけてね。」と子どもたちに声をかけたり、保護者の方に「靴下を脱いだ方がすべりませんよ。」と伝えたり私たちから行動することが重要だと学びました。子育て支援に参加すればするほど、「あそこが危ないな」と自然と気づくことができるようになり、学生同士、「あそこが危ないと思うんだけどどうすればいいかな?」「～に注意してね。」と声をかけあうことができるようになりました。ゼミTシャツを作ったことによって、参加者が多くても学生をすぐに見つけることができ連携がとりやすくなりました。

以上の記述からもわかるように2年生になると自分たちで考え、行動できる力がついてきている。その力は実習に、就職試験に役立ったと述べている学生も見られた。これらの力は一朝一夕についたものではなく、多くの学生が言及しているように「回数を重ねていく」ことによって身についていくものである。そして学生自身が「身についた」と自覚できたということが大切な点である。そのことが自分の自信となり、実習あるいは就職試験にのぞむことができる。

参加者の感想および学生のレポートから学外活動の意義について考えてみたい。保護者とのコミュニケーションの取り方や子育て支援活動を行う際の配慮事項等については、学内で実施されるあそびの森と同様に学習することがで

きる。学外での活動はそれに加えて地域の子育て支援活動の現状を知ることができるというメリットがある。

学生は、地域でどのような子育て支援がなされているか、学ぶ機会を持つことが難しい。したがって、学外での活動は、地域での子育て支援の現状を知ることができ、さらに、地域の方々と協働することの大切さや難しさを知ることができると思われる。また、参加者の感想から学生が活動に参加することを喜んでいただいていることがわかる。このように地域の方々のニーズを知り、地域の方々に喜んでいただけるという経験は、地域貢献について考えるよいきっかけになるのではないだろうか。

保護者とのコミュニケーションの取り方や子育て支援イベントを行う際の配慮事項を学び、身につけるには学生からのレポートからもわかるように、「回数を重ねる」ことが重要である。学内でのあそびの森だけでは回数に限りがあるので地域での活動に参加させていただくことで経験回数を増やすことができる。

今後もこのような機会をできる限り多く持つよう検討していきたい。

おわりに

今回振り返ってみると、これらの出張あそびの森は、保護者、すなわち地域のニーズに即した活動であることがわかる。それと同時に学生はこれらの活動により非常に多くのことを学ぶことができているのだと改めて感じた。

両者にとってともにメリットがある出張あそびの森であるが、どちらか一方に負担や不満があるという関係でなく、対等な立場で活動を進められることが重要である。そのためにも主催者と打合せを密にし、しっかりと連携をとることが求められる。

また、出張する回数が増えることにより、準備する時間が十分にとれないことは避けなければならない。特に中途半端なパフォーマンスをすることは参加者に対して失礼なことであり、参加者にとっては1回限りであるという責任を自覚し、完成度の高い講座を実施する必要がある。

さらに送迎にスクールバスを使わせてもらえ

ることで、これら出張あそびの森が可能となっており、学校側および関係各位に感謝申し上げる次第である。